

「てつがく創造活動」 中学年部会

1 研究の内容

(1) 中学年の「てつがく創造活動」ーボトムアップに見とりながら学びをつくるー



図1: サークルでのてつがく対話

プロジェクト型活動（以下、PJ）とてつがくから成る「てつがく創造活動」は、3年生から設定されているが、低学年における学びをボトムアップに見とりながら、一人ひとりの“やってみたい”、“考えてみたい”という思いをもとに活動をつくっている。

3年生のPJでは、まずはやってみることを大切に、試行錯誤しながら、とことん自分のしたいことに取り組む時間をつくってきた。そして、活動とともに週に1度のペースで、サークルの形(図1)となって、PJの取り組み状況や今後への思いなどを聴きあい、分かちあうことを重ねてきた。また、てつがくの時間には、PJでの活動をふり返り、悩んだり困ったりする中で生じた思いや活動を進める中で生じた疑問を共有し、それぞれの思いを聴きあい対話することも行ってきた。活動の中での対話や活動をふまえた対話を通して、てつがくするとともに、互いの思いを知り、感じ方の違いに気づいたり共感したりする中で、「自分」を見つめていく営みを大切にしてきた。

このような経験をしてきた4年生では、少しずつ自分のPJのイメージを長く持ちながら、時に立ち止まり自分の思いを確認し、活動を調整して進める姿が見られるようになる。そして、協働的に活動を進める中で、他者の思いや考えを受け止め、様々な形の対話を通して自分を見つめ、困難なども乗り越えていこうとする姿を見守ってきた。

また、興味にもとづき活動が始まるPJでは多様な活動が行われる。活動の場を共有することや、取り組みを他者にひらく機会(図2)をつくることで、友だちの興味に触れ、友だちを知るとともに、互いの思いを尊重する姿へとつながる。そして、このような場が、興味や活動をひろげるきっかけになるとともに、アドバイスをもとに活動をよりよいものへしていこうとする姿へとつながると考えている。



図2: プロジェクトの取り組みを他者にひらく姿

(2) 今年度の研究課題

昨年度と同様に、今年度の研究課題を次のように設定し、継続的に研究に取り組んでいくこととする。

- ・子どもの探究する姿をロングスパンでとらえながら、個々の取り組みの変化を見とっていくとともに、活動や対話を通じた経験を繰り返し積み重ねていくことによって育まれていくメタ認知スキルや社会情意的スキルについて一人ひとりの姿から見とっていく。
- ・子どもたちの学びに寄り添い、ともに歩む教師の役割について考えていく。
- ・「てつがく創造活動」におけるてつがくとPJの関係について考えていく。

(3) とともに歩む教師の役割

多様な活動が進むPJにおいて、一人ひとりの活動を常に見とることには難しさも感じる。だからこそ、「その子どもにとって、この活動や対話が、いま、どんな意味をもちつつあるかに持続的に関心を向けつづけること」⁽¹⁾を大切に、その子の行動や言葉の背景にある思いを知ろうとする努力、わかろうとする努力をしてきた。あわせて、教師同士で、子どもの姿や出来事を語り合う時間をとり、子どもの願いやその意味、そしてそれに対して教師はどのように関わるべきなのかについて考えてきた。

「ともに歩む教師」とは、ただ横にいるというわけではない。見守る場合でも、その子の思いを受け止め、ビジョンをもって見守ることが重要と考える。必要に応じて問い、考えを聴き、時に教師の思いも伝えていく。それをどう受け取るかは子どもに委ねられ、当然ながら、受け入れられないこともある。子どもの行動には背景があり、理由があり、そこに子どものこだわりが表れることがある。子どもの思

いに寄り添い、思いを受け止めながら、教師のビジョンも修正していく。教師の提案が、その子にとって本当によいかはわからない。それを自覚し、子どもにとって意味があるのか、そして、今伝えるべきかを含めて自問しながら、謙虚に地道に丁寧に子どもと向き合っていく。また、先述したように「てつがく創造活動」を進める中では、例えば、「発表するのは何のため？」や「自由にできるって？」のように、様々な思いや疑問が生じる。「てつがく創造活動」を通して生じる様々な問いに対して、教師自身も一人の学び手として向き合い、“てつがくする”ことを通して、子どもたちとともに考えていく。

さらには、教師の役割の1つとして“つなぐ”ことがあると考える。子どもたちが、活動を進める中で立ち止まり、自分で自分や自分たちを見つめ、より善いものにしていこうとするためには、自分の世界を広げていくような他者や自分を見つめていくための他者の存在が必要である。このように考えた時、活動を進める中で他者とつながる場をつくり、それを支えていくことも教師の役割と考える。

自分の考えや取り組みを大切に、大切にされるからこそ、他者の考えや取り組みに興味をもち、大切にしていけることができる。教師自身、活動や対話において子どもたちの興味や思いを大切に、自分の知らない世界や考えの違いを面白がる、一緒に考えていくことをたのしむという姿勢でいたい。

(4) プロジェクト型活動とてつがくの関係

PJを進めていく中では、進め方や友だちとの関わりなどについて悩んだり、立ち止まったりすることがある。PJを通して生じた友だちの思いや葛藤を聴き、皆で考えていくことは、友だちの考えを知り、自分の考えを見つめ、今の自分の考えや状況、進め方などを問い直していくことになる。そして、対話を通して、活動に対する友だちと自分の考えの違いなどを知ること

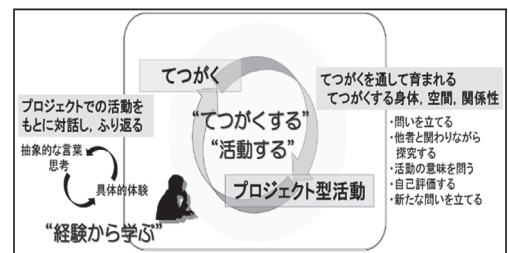


図3：プロジェクト型活動とてつがくの関係

とは、取り組みをふり返り、気づいていなかった活動の意味や価値を見出すとともに、よりよい活動やそれに対する自身の向かい方を問い、考え、取り組んでいくことにも繋がる。

PJとてつがくでの取り組みが、常に独立したものではなく、必要に応じて関係づけられていくことが、自分や自分たちの手で、主体的に学びを進める姿に繋がると考える(図3)。

なお、“てつがくする”ことは皆で対話する時のみ行われることではない。しかしながら、「てつがく創造活動」の中にてつがくの時間を設け、様々な問い、様々な形で対話する場をつくり、皆で考えていくことの楽しさやよさを実感しながら、てつがく的思考やてつがくする身体、空間、関係性を、徐々に育てていくことが必要と考えている。

2 “てつがくする”ことを通して“学びをあむ”

様々なひと・もの・こととの対話を通して探究していくことは、取り組んでいる対象や考えている対象とじっくりと向き合い、深く理解することだけでなく、自分自身の理解のあり方や自分自身と対象との関係について問い直し、考えていくことになる。このような営みが、学びをあむ—自分の思いを大切に、様々なひと・もの・ことと関わりながら新たなもの・ことを創り出し、自己を更新していく—ことになると考えている。

3 具体的実践

(1) 3年生の実践

①活動の概要

3年生は、自身の興味・関心にじっくり向き合いながらPJを始動させ、1学期前半から30以上の多様なPJが立ち上がった。活動の終末やてつがくの時間には、サークル対話を行い、お互いの活動について思いを聴き合う時間を設定した。また、各学期末にはPJの取り組みを紹介する場を設定したいという子どもの願いからPJに関する発表会を行った。保護者や友だちに自分たちの活動を聞き、そこで受けたフィードバックを参考にして活動を振り返り、今後の取り組みを検討した。以下に示すのは、このような学びの過程における具体的事例の一部である。

② “てつがくする”ことをもとにしたゴールの設定と“活動する”ことによるゴールの修正

歴史PJは、設立当初、歴史好きなU児を中心にして、お気に入りの歴史の本を持ち寄って、どんな戦いをしてきたのかや戦国武将の異名などをまとめる活動を行なっていた。思いのまま意欲的に取り組んでいる一方で、活動の見通しが曖昧だと見とった教師は、6月初旬のてつがくの時間に、PJのゴールについて考える場面を設定した。歴史PJは、「みんなにあまり目立っていない武将を知ってもらう」というゴールを設定し、学級の友だちを対象に「知っている武将」について問うアンケート調査を行ったが、調査からそもそも歴史があまり好きではなかったり、武将について全然詳しくなかったりする人が多くいることを知った。これを受けて、歴史の年表をすごろく形式にして、すごろくを体験しながら「楽しく武将を学ぶ」ことのできる活動を発案し、PJの発表会（あそぶDAY）で公開する計画が設計された。このように歴史PJは、てつがく対話で目標を設定したが、活動する中で歴史が好きな自分たちと、そうでない他者との違いを知り、目標を修正しながら取り組んだ。

修正した目標に沿って臨んだあそぶDAYでは、多くの保護者や子どもが「歴史すごろく」を体験した（図4）。参加者から書いてもらった付箋のコメントには、例えば「すごろくにもたくさんの歴史の情報がつまっていて楽しみながら勉強することができました」といった意見が多数見られ、フィードバックを受けて、達成感を得る歴史PJのメンバーの姿があった。



図4：あそぶDAYの様子

③ “活動する”ことを通して、他者と関わるよさや価値を学ぶ

友だちと関わり合って学ぶことやサークル対話の参加も消極的であったM児は、1学期のPJにおいて学級内のPJにちょこっと体験目的で参加したり、読書したりしながら、本当に自分がしたいことは何かを模索している様子であった。1学期終盤は、ゴーストPJの一人として「怖い話」の紹介をしてきた。興味のあるものが見つかるほど活動に取り組むことを知っていた教師は、M児がそのような没頭できる活動を見つけるまで、時折他のPJを紹介しながら長い目で見守っていた。

2学期のPJでは、隣のクラスのK児とPCを使ってイラストに動きを持たせた動画を作ったことをきっかけに、アニメーション作りに没頭するようになり、一人で黙々と活動に取り組んでいた。そんなM児が作った動画を面白がって見ていたS児とN児は、しだいに自分たちもやってみたいと考えるようになり、M児に作成方法を教えてもらいながら一緒に動画作りに取り組んだ。3人が作成した動画はたちまち学級で話題になり、徐々にメンバーを増やして計8人の「アニメーションPJ」が設立され、M児はこのPJのリーダーとなった。ここでは、リーダーとして温かい雰囲気を作れるよう教師が支援した。

M児はこのPJを通して友だちと関わる機会が急増した。動画の作り方を教えたり、できた動画を自慢げに紹介したり、意見をもらって動画を修正したりして活動を楽しむ姿が見られた。みんなと喜びを共有しながら、活動が楽しいものになるように取り組んでいた。とりわけ、消極的だったサークル対話に進んで参加し、「（最近入ってくれた）Nさんが初めてだというのにすごい上手くて、ちょっと感動しました。今のアニメーションの数は（メンバーの）合計、たぶん30個くらいかな。みんな上手い！みんな上手い！！」と話した姿は、PJを通してM児が他者から認められ、そして他者を認め、ともに関わるよさや価値を経験的に学んだことを意味している。

（2）4年生の実践

①活動の概要

4年生は、「私の好きを探究しよう」ということを軸に活動を行ってきた。4月は活動に入る前に、そもそも好きとは何かを考えるため、まず自分の「好き」を見つめ、そこから「好きって何？」という問いでてつがくをした。対話の中で子どもたちから次のような意見が出された。「好きな人は気に入っている、ものでは大切に思う気持ち、ことでは少しでもやりたい」「それだけで頭がいっぱいになる」「いつでもやりたくなる」「夢中になれるもの」「自分が無自覚にやったり見ちゃったりすること」などだった。さまざまな「好き」が出されたものの、自分の「好き」は何かについて悩む子どもが多かったため、8回の「お試し期間」を経て、本格的な「好き」へのPJ活動が始まった。

②つくりたいものをつくる個人と協働の間で揺れるH児

「好きって何？」でのてつがく対話でH児は、「恋はドキドキ、ハラハラするけど、普通の好きは恋より安心できる、習い事とかで注意されても夢中だから『もっとがんばろう!』と思える」と話していた。ミニチュア粘土スライムPJに入ったH児は、紙粘土で県の形や名産を作り、思う色が出せると喜んだ。2学期に入ると、PJとして一つのものをつくりたいという案が出てミニチュアのおかしの家をつくることとした。H児は、よりリアルなものを作りたいと、画像検索をし、色づかい、表面のしわや傷、焼き色などに注意して作っていった。このPJは、他のPJの中間発表に行ったら景品をもらったことから、自分たちも何か景品を作らなければと考え、その後の活動は全て景品づくりとなった。そのような中でH児の表情や声のトーンが変わってきた時期があった。声のトーンが低いときになぜかと聞くと、「A児がどんどん指示を出してきて、本当は違うことを思いついたんだけど今はやるしかない。」ということだった。「自分の考えたことを話してみたら？」と話すと、「A児の考えはおもしろいと思うし、このままの方が平和だからいいです。」と答えが返ってきた。教師は、このまま様子を見ることにした。発表当日は、自分たちが好きなミニチュアづくりを体験してもらい、最後に景品を渡していた。この活動経験があったからか、H児は2学期のふり返りに「工作が好きなのでなにかをつくってあげれば好きには近づけていきます。でも景品づくりばかりをやっているとちがうな～とは思いました。なぜなら私は、同じものをたくさんつくるよりも、ちがうものをつくる方が好きだからです。けれど、とうめい粘土が触れたことはよかったです。3学期は、少し遠慮もするけれど、自分のつくりたいものや目的に向かってやりたい。」と記した。自分の好きとグループでの活動へのズレを実感しているのだと思う。

③てつがくを通して、活動を問い直す

H児を見ていてもう1つ自分の「好き」を考えていると思える場面があった。11月に学級で次のてつがくの問いを考える際、「中間発表なのに、遊んでいる人がいたのはいいの？」という声をきっかけに「なぜ発表をするのか」について対話することにした。対話の中では、発表の目的や方法を考える意見がたくさん挙がった。その中で「俺がスポーツプロジェクトの時に試合ばっかやってて、遊んでいるんじゃないの?と」言われた。そういうのを言われぬように発表で自分たちが何してきたのかというのを伝える」という意見があった。この対話の後、H児は、私のところへ来て「自分のやっているミニチュアは遊びかな。」と言った。なぜそう思うのかと聞くと、「遊びって好きなことをやっていることだと思うから、私たちがやっているのも、ただミニチュアを作りたくて作っているから遊びじゃないかなと思った。」「好きなことをやっているだけは遊びなの?」と聞くと、「プロジェクトの時間は、ふり返りをしている、自分たちがどうしたいのかを考えている。ただやっているのとは違うんだけど、でもミニチュアをつくるのがただ楽しい、ずっとやりたいと思うから遊びなのかなとも思う。」と。これまで自分たちがただ楽しくて好きなことをやっていたことはどういう意味をもつのか、立ち止まって自らの活動の意味を考えている姿が見られた。PJ活動の経験からの対話が、普段なんとなく立ち止まることなく活動を続けていたH児が立ち止まり、自分の活動を問い直す場面が見られた。

4 今年度の研究のまとめと今後に向けて

自分の興味にもとづき、自分のしたいことをやってみる姿を見守るとともに、対話を通して考えることで、立ち止まり、自分や自分たちの取り組みをふり返る場をつくってきた。そして、互いの感じ方の違いに気づいたり共感したりする中で、「自分」を見つめていく営みを大切にしてきた。

同時に、実践をしながら、そして、実践をふり返りながら、「ともに歩む教師とは?」と問い、教師同士も、対話を通して自分や自分たちの取り組みを見つめてきた。引き続き、子どもの姿をロングスパンで見るとともに、主体的な探究を支える教師の役割について考えていきたい。

1) 岩川直樹先生は、中学年部会の取り組みに対して、「体験はあくまでもその人にとっての体験だということを、私たちがどれだけ深く自覚しているか」が重要であり、「それぞれの子どもにとっての体験およびそれとの向かいあい、その子どもにとっての自己の再形成の契機になる」と述べ、そのためには、「外側から子どもに『〇〇力』がついているかいないかのモノサシをあてがうのではなく、その子どもにとってこの活動や対話が、いま、どんな意味をもちつつあるかに持続的に関心を向けつづけることが、その教育実践の底流になる」と述べている。(第83回教育実践指導研究会「てつがく創造活動」中学年部会の記録より)

(有働, 久下谷, 富田, 比樂, 山賀)